

我が国では、昔から、「苦しい時の神だのみ」といふ諺があって、平生は神の存在さへも考へてゐないくせに、一旦困窮した状態に陥ると、一心に神の加護を祈る、といふ者が多い。然しながら、その苦しい場を切り技けると、途端に、「のど元過ぎれば熱さ忘れる」の諺通り、神に祈ったことさへ忘れてしまふ、といふのが日本人の一般の姿のやうに思はれる。だから、日本人の神に対する信仰心は、欧米に比べても、その他いづれの国の人々に比べても、“薄い”と言って間違いが無いのではなからうか。

それと言ふのも、自然に恵まれた日本といふ国に生れ育ち、暮してゐるからさうなるのである、と私は思つてゐる。幼児だって、母親の助けを必要としない時には、母親の存在を忘れて勝手な事をしてゐるではないか。私もさうであるが、日本人は大方が神に対して、母親に対するやうに甘えてゐるのだと思ふ。

これに反して、欧米人の神に対する姿勢は厳肅である。だから、お宮参りもするし、お寺詣でもするといふ日本人が不可解なものに思はれるに違ひないと思ふ。然し、お宮参りもするし、お寺詣でもするし、また、教会に行つて礼拝も出来る、といふのが本当ではないかと私は思

つてゐる。なぜなら、日本人を作つた神と、インド人を作つた神と、ユダヤ人を作つた神と、その他あらゆる国の人々を作つた神とが皆別々の神であるわけが無いと思はれるからである。人間を作り、この世を作つた神様が何柱もゐらっしゃるわけが無いではないか。だから、神道の神も、仏教の神も、キリスト教の神も皆同じだと私は思つてゐる。

一つの山でも、それを見る場所によっては全く異つた山のやうに形が違つて見えるものである。然し、それでも山そのものに違ひがあるわけでは無い。それと同じで、神にしても、これを見る立場によつて異なる所があつても、神そのものは一つであると言はなければならないであらう。だから、日本の神も、インドの神も、その他いづれの神も皆同じであつて、お宮の神様を敬ふ程の人ならば、仏教の神様もキリスト教の神様も敬ふのが当然の道理であつて、キリスト教の神様には礼拝できるがそれ以外の神様には礼拝できないといふのは、狭量といふよりも道理に背いてゐる、と私は思ふ。

民族によつて神の姿が異つて見えるのが当然だと悟れば、自分たちが考へる神だけが本当の神だなどとはとても言へなくなるのではないか。さうならなければ、世界の平和などとても期待できないと思ふ。我々日本人が率先して総ての神々を礼拝し、「和して同ぜず」の精神を身を以て示し、平和の実を楽しむ姿を見せるならば、よその民族も追々

日本語の再発見

と理解し、真似るやうになるのではないだろうか。

「桃も^{すもも}李も何も語らないけれども、その下に人が自然と訪れるために道が作られる」といふ諺の通り、河事でも実績を挙げれば、よそは必ずそれを見てみて真似るものである。だから、これこそ日本人が世界に対して出来る最大の寄与ではないかと私は思ふ。